

葉山館 HAYAMA

4/7(土)ー5/27(日)

休館日:月曜日(4月30日は開館)

光と影の生命 須田国太郎展 没後50年に顧みる

SUDA Kunitaro:
Looking Back 50 Years After His Death



須田国太郎(大)1950年 東京国立近代美術館蔵

5/28(月)ー6/8(金)展示替休館

6/9(土)ー7/22(日)

休館日:月曜日(7月16日は開館)

*7月3日(火)より一部展示作品が替わります。

生誕100年

松本竣介展

MATSUMOTO Shunsuke
A Centennial Retrospective



松本竣介(郊外)1937年 宮城県美術館蔵

7/23(月)ー8/3(金)展示替休館

8/4(土)ー10/21(日)

休館日:月曜日(9月17日、10月8日は開館)

国立民族学博物館コレクション ビーズインアフリカ

The Collection of
National Museum of Ethnology
-Beads in Africa



(像(人頭))地域:カメルーン共和国 民族:バミレケ族

10/22(月)ー11/2(金)展示替休館

11/3(土・祝)ー1/14(月・祝)

休館日:月曜日(12月24日、1月14日は開館)

桑山忠明展 HAYAMA

Tadaaki Kuwayama HAYAMA



桑山忠明(光庭のためのプラン(ゴールド、シルバー))2011年
金沢21世紀美術館での展示 撮影:木村健

1/15(火)ー1/25(金)展示替休館

1/26(土)ー3/24(日)

休館日:月曜日(2月11日は開館)

美は甦る 検証・二枚の西周像 ー高橋由一から魏光までー

Verification of the Two Portraits of NISHI Amane
-From TAKAHASHI Yuichi to AIMITSU



高橋由一(西周像)1893年 津和野町郷土館蔵

須田国太郎(1891-1961)は、京都大学で美学・美術史を学び、並行して関西美術院でデッサンを学びました。その後、スペインに留学し、ヴェネツィア派の色彩理論や、バロック絵画の明暗法を研究しています。帰国後は、西洋絵画を基礎にしながら、日本独自の油彩画を生み出そうと努力を重ね、その成果は独立美術協会展を中心に発表されてきました。本展は、1932年に東京銀座の資生堂画廊で開催された第一回個展出品作や独立美術協会展出品作を中心に、風景や草花、鳥や動物などを描いた主要作品約130点で構成し、独特の深遠な境地に到達した須田国太郎の世界を回顧します。

東京に生まれた松本竣介(1912-1948)は、少年時代を岩手で過ごしたのち、画家を志し上京し、舟越保武や麻生三郎らと交流を持ちながら制作に取り組み、1935年に第22回二科展に初入選、以後(立てる像)などの代表作を発表しました。モンタージュ技法を用いた独特な雰囲気のある都会風景や自画像を描く一方、妻植子と共にデッサンとエッセイの月刊誌「雑記帳」を創刊するなど、文芸活動にも取り組みましたが、1948年、病気のため36歳の生涯を閉じました。生誕100年を記念する本展は、初期から晩年までの油彩画、水彩画など約120点とあわせて、交友のあった作家たちとの間の資料や、竣介自身が撮影した写真なども展示します。

人類の歴史とともに世界各地で生まれたビーズ。その魅力は今なお私たちを魅きつけてやみません。世界各国との交易を通して独自の歩みをたどり、今なお生き続けているアフリカのビーズは、単に美しい装飾品であるばかりか、呪術や儀式上の意味が込められ、富の象徴、社会的権威や民族性と深く結びつき、役割も実に多様です。ビーズを主題とした展覧会としては公立美術館で初の試みとなる本展では、アフリカのビーズに焦点をあてながら、ビーズが人々の歴史、社会、文化といかに深くかかわってきたかを、国立民族学博物館の学術協力のもとに、膨大なコレクションから約250点の作品資料で紹介いたします。

1958年に渡米、70年代のミニマルズムの台頭と呼応しながら、以来半世紀を超えてニューヨークを拠点に第一線で創作活動を続ける桑山忠明(1932-)。モノクロームの矩形を組み合わせた無機質な平面作品から、メタリックな色彩のパネルや立体物が連続的に構成される90年代以降のインスタレーションへと規模を拡大しているその表現は、つねに静謐な光を湛え、絵画と空間の臨界を問う実験性に満ち溢れています。自然採光や海景といった、葉山館の特徴ある展示室に展開するインスタレーションによって、桑山忠明の造形思想の現在を明らかにする待望の展覧会です。

高橋由一(1828-1894)の(西周像)と言われている2枚の肖像画の1点がこのたび見事に修復されて新しい生命を与えられたのを記念して、2枚を展示し比較検討することで、日本の近代美術の謎に迫ります。そのほかに、新取蔵の秀作、藤田嗣治の《キキ・ド・モンパルナス》や岸田劉生の《童女園(麗子立像)》など、所蔵品を通して近代の洋画の流れを紹介いたします。

鎌倉館 KAMAKURA

4/7(土)ー6/10(日)

休館日:月曜日(4月30日は開館)

*5月15日(火)より一部展示作品が替わります。

石元泰博写真展

桂離宮 1953, 1954

ISHIMOTO Yasuhiro
Katsura Imperial Villa



石元泰博(桂離宮 水屋附近石組(松亭亭))1953-1954年
高知県立美術館蔵

6/11(月)ー6/22(金)展示替休館

6/23(土)ー9/9(日)

休館日:月曜日(7月16日は開館)

コレクター気谷誠の眼 鯨絵とボードレール展

The Kitani Collection
-Namazu-e and Baudelaire



(鯨を押さえる鹿島大明神)安政2(1855)年頃
当館蔵(気谷コレクション)

9/10(月)ー9/21(金)展示替休館

9/22(土・祝)ー12/24(月)

休館日:月曜日(10月8日、12月24日は開館)

[第1展示室]

シャガールとマティス、 そしてテリアード

20世紀フランス版画と出版

French Prints and Publications in the
20th Century
-Chagall, Matisse, and Tériade-



マルク・シャガール(『ダンスとクロエ』原絵)1961年
当館蔵(望月富助コレクション)
©ADAGP, Paris & SPDA, Tokyo, 2012, Chagall ©

[第2展示室・彫刻室]

江口週展

彫刻とデッサン

EGUCHI Shu:
Sculptures & Drawings



江口週(作品 G-No.1)1960年 三重県立美術館蔵[左]
江口週(デッサン)1960年 作家蔵[右]

12/25(火)ー1/11(金)展示替休館

1/12(土)ー3/24(日)

休館日:月曜日(1月14日、2月11日は開館)

戦後芸術を切り拓く 実験工房展

Jikken Kōbō
-Experimental Workshop-



「実験工房」の記念写真 撮影:大辻清司 1954年頃

石元泰博(1921-2012)はサンフランシスコに生まれ、幼少時に父の故郷である高知県に帰郷し1939年に再び渡米、パウハウスの教育理念を継承したシカゴ・インスティテュート・オブ・デザインで写真の教育を受けました。1953年頃からは日米を行き来し、戦後日本の写真界に多大な影響を与え、1969年以降は日本を拠点に精力的な活動を展開しました。

本展では、展示空間となる鎌倉館が坂倉準三(1901-1969)によって建てられたのが1951年であることと共鳴すべく、膨大な作品の中から1953、1954年に制作された(桂離宮)のシリーズに焦点を絞り展覧します。戦後間もない時点で日本のモダニズムが到達していた高いレベルを再確認する貴重な機会となるでしょう。

寄贈を受けた気谷誠コレクションの中から、個人コレクションとしては出色の鯨絵や明治期の銅版画など約40点、さらに19世紀フランスの詩人ボードレールと同時代に生きた銅版画家シャル・メリヨン(1821-1868)の研究を深く極めた氏が愛蔵した19世紀の西洋版画などを約40点、総計約80点で気谷誠の世界を再構築します。

色彩豊かな絵画で名高いシャガール(1887-1985)とマティス(1869-1954)はともに、版画作品でもその才能を発揮しています。本展では、シャガールの《ダンスとクロエ》や《サーカス》、マティスの《ジャズ》といった華やかな版画のシリーズを中心に、20世紀のフランス版画を紹介いたします。そして、同時代の美術出版をリードし、シャガールやマティスの版画集も制作したテリアード(1897-1983)の編集による美術雑誌「ヴェルヴ」など、彼らの制作を後押しした出版物にも目を向けます。

クスなどを素材にした量塊感に溢れる本彫で知られる江口週(1932-)は、60年代初頭から注目され、素材に隠された彫刻のかたちを構築的空間への強靱な意志によって抽出し、簡潔でありながら複合的で豊かな彫刻世界を繰り広げています。一方、そのデッサンは、彫刻家が制作の初期段階で抱いた感情や着想を瞬間的にとどめており、その思考や創造の過程、あるいは完成した彫刻だけでは分からない作者の意図を見ることが出来ます。本展では60年代に制作された作品と近作を併せて展示し、そのデッサンと彫刻を通して、抽象彫刻の第一人者としての仕事の展開を再検証します。

「実験工房」は、美術家の山口勝弘、北代省三、福島秀子、音楽家の武満徹、湯浅譲二などジャンル垣を越えて集まった若手の芸術家たちによって、1951年に結成されました。本展では、戦後芸術の新しい時代を生み出したグループとして、近年、国内外で再評価の動きが高まっている「実験工房」の全貌を、絵画、立体、映像、写真のほか、楽譜や公演プログラムなど、新たな調査にもとづく作品及び関連資料約300点の展示を通して紹介します。また、映画やパフォーマンス・アーツなど多岐にわたった彼らの活動を捉えなおすため、各分野の専門家による講演会やイベントを行います。

鎌倉別館 KAMAKURA ANNEX

4/7(土)ー6/10(日)

休館日:月曜日(4月30日は開館)

村山亜土作「夜の絵」とともに 楠木沙弥郎展

YUNOKI Samiro



楠木沙弥郎《夜の絵》より 2005年 当館蔵

6/11(月)ー6/22(金)展示替休館

6/23(土)ー9/9(日)

休館日:月曜日(7月16日は開館)

古都鎌倉と近代美術

併陳・新取蔵作品展

ー藤田嗣治(キキ・ド・モンパルナス)初公開
Ancient City of Kamakura and Modern Art/
New Acquisitions 2011



朝井雨石衛門(祭(1))1977年 当館蔵[左]
藤田嗣治(キキ・ド・モンパルナス)1926年 当館蔵(北川原コレクション) [右] ©ADAGP, Paris & SPDA, Tokyo, 2012

9/10(月)ー9/21(金)展示替休館

9/22(土・祝)ー12/24(月)

休館日:月曜日(10月8日、12月24日は開館)

夭折の画家

小野元衛 1919-1947展

ONO Motoe 1919-1947



小野元衛(市街風景)1943年 個人蔵



小野元衛(法隆寺金堂)1943年 個人蔵

12/25(火)ー1/11(金)展示替休館

1/12(土)ー3/24(日)

休館日:月曜日(1月14日、2月11日は開館)

戦後の出発 1945年以後

混乱と希望の時代

Departure from the War-From 1945
The Aftermath and Sprouting Hope



村山正成(天使とトピア)1951年頃 当館蔵

今年90歳を迎える染色作家、楠木沙弥郎(1922-)の新作を含む展覧会です。楠木は復員後、父祖の郷里である倉敷の大原美術館に勤め、そこで柳宗悦らの提唱する「民藝」に出会い、芹沢銈介に師事するなかで染色の道を歩み出しました。「民藝」を基としながらも、楠木の世界には型にとらわれない、自由な精神の飛翔ともいべきユーモラスな軽みが感じられるでしょう。本展では型染布とあわせて、作家が精力的に取り組んできた本の仕事も紹介します。村山亜土(1925-2002)は画家・劇作家・演出家の村山知義と詩人・童話作家の壽子とを両親にもつ児童劇作家です。楠木が村山亜土の遺稿をもとに制作したシリーズ(夜の絵)では、小さな布のカラーージュが言葉に触れ合うように施されています。光があたかたもなく消えてゆく夜への鎮魂が、「雨だれの響き」となって伝わってくるでしょう。

日本で最初の公立近代美術館として1951年に開館した神奈川県立近代美術館は、鎌倉という土地と、そこに暮らす多くの文化人と深いかかわりを持ち、支えられてきました。本展では、当館の所蔵作品から鎌倉にゆかりの作家や作品を紹介いたします。併陳として、2011年度に当館に収蔵されたジョルジュ・ルオー、上村松篁、砂澤ビッキなどの作品にあわせて、北川原コレクションとして加わった藤田嗣治の(キキ・ド・モンパルナス)を初公開します。

小野元衛(1919-1947)は滋賀県近江八幡に生まれました。染織家で、人間国宝の志村ふくみ(1924)は5歳下の実妹です。小野は画家を志して上京し、文化学院で学びました。村山槐多、松本竣介、岸田劉生など同時代の画家に影響を受けながら、戦争の影が忍び寄る東京で駿河台のニコライ堂周辺や不動明王などを独自の手法で制作しました。病いに倒れ28歳の若さでこの世を去ったため、生前作品を世に発表することはほとんどありませんでした。今回の展覧会では、これまで美術史の中で語られることのなかった画家小野元衛の作品約80点を展示し、紹介します。

●スケジュールの内容は変更される場合があります。